

4K/2K、HDR/SDR サイマル制作の効率化提案

日本の放送フォーマットは元気で、世界で一番だろう。2Kがあり、4Kと8Kが新しく加わってきたからだ。さらに現行SDR (Standard Dynamic Range) から表現可能範囲のダイナミックレンジを拡張したHDR (High Dynamic Range) が展開する。ところが、それぞれの相互変換はもちろん、制作をどう効率するか、といった課題が出てきた。本特集では、その動向に着目した。(編集部)

8K/HDR作品を撮った
関西テレビ報道映像カメラマン樋口耕平氏

アジアテレビ賞 “最優秀撮影賞” の快挙

アジアのテレビ界で権威ある「アジアテレビ賞」は1996年に創設され、今年で23回目を迎える。テレビに関連する業績を42部門で表彰する中で、今回、関西テレビ放送(カンテレ)が初めて挑んだ8K/HDR制作オリジナル映像作品『つくるということ』を撮影した樋口耕平カメラマンが最優秀撮影賞に選ばれた。サイマル制作の特集ではあるが、8K/HDR撮影の貴重な感触を樋口氏に寄稿してもらった。

作品『つくるということ』(2017年制作)は、ミナ ペルホネンというファッションブランドのものづくりへの想いを映像化したもので、監督・編集・グレーディングは弊社の制作技術センターの矢野数馬が担当しました。矢野は普段、連続ドラマなどを手がける編集マンで、報道カメラマンである私とは、いわばセクションの垣根(?)を越えたタッグなのです。

撮影はおよそ2年前(2017年3~4月)、撮影日数は6日間。作品の構成は、実際の作り手を取材したドキュメンタリーパートと、モデルの女性が演じるイメージ映像パートに分かれています。撮影は、前者を報道スタイル(ワンマンオペレート)で、後者をドラマスタイル(VEあり、モニターあり)で行いました。

撮影カメラはF65RS(ソニー)を使用。最大の懸念は、思ったようにピントが合うのか、でした。ところが、8Kモニターは巨大かつ希少で、社内で所有していませんし、長期間借りるには金額の問題もあり、撮影期間中は用意できませんでした。ですから撮影時にはできるだけズームでテレ端まで寄って、さらにMAGで拡大して確認し、同時にカメラTOPモニターのカラーピーキングに目を凝らし、VEにも別モニターで確認を頼む、という原始的かつ入念な作業をワンカットずつ繰り返しまし



た。ちなみに、私が本当の意味でフォーカスを確認できたのは、8Kで仕上がった完成作品を8Kモニターで初めて上映した時でした。

ドキュメンタリーパートでは、そこまでの慎重さは時間的にも空間的にも人員的にも不可能です。報道スタイルのワンマンオペレートのため、頼みはビューファインダーとカメラTOPモニターのみで、VEはいません。監督からは「飛んでいる蝶のつがいに寄ってほしい」とか、「舞い落ちる桜の花びら一枚をフォローしてほしい」といった要望が飛んできます。さらにハイスピード撮影をしてほしいと。そうすると、フォーカスはもう勘に近い感覚です。果たして、最初の8K上映の時の安堵感は格別でした。

HDRは、以前に経験していたこともあり、ワン

マンオペレートに大きな不安はありませんでした。ファインダー内のウェーブフォームやゼブラを設定・確認しながらアイリス調整を行いましたが、前作の感覚が残っていたこと、RAW収録ということもあって、基本的には“飛ばさない”ように過不足なく露出を管理できました。

8K/HDRで重視したのは、その描写力を駆使して「何を伝えるか」ということ。8K/HDRは、くっきり鮮やかなだけではなく、作品性や物語の内容をよ

り良く表現するための技術、と捉えて撮影に臨みました。幸い、作品としてニューヨークフェスティバル「金賞」受賞など高い評価を得られ、私自身もアジアテレビ賞「最優秀撮影賞」を受賞することができました。

また、この作品は映像祭やテクニカルイベントでの8K上映に加え、4K、HDにダウンコンバートして配信・放送されています。ダウンコンしても、その映像美は8Kと同等とまではいえませんが、十分な質まで持っていていけると感じます。豊かな階調と広い色域を持つ8K/HDR制作だからこそ、HD/SDR版においても選択肢が多く、優れた表現にたどりつけたし、あらゆるフォーマットに対応・調整できるマスターデータとしても8K/HDRで制作した意味は大きかったと思います。